水曜通信31

2023年
10月

東北学院宗教センター編

第66回 水曜公開礼拝
2023年10月18日（水） 18：30－19：00

＜礼拝次第＞

前　奏：J.G.ヴァルター作曲
　　主よ、みことばをもて我らを守りたまえ

讃美歌：讃美歌21　226番「輝く日を仰ぐとき」

聖　書：創世記　1章 6-7節

讃美歌：讃美歌21　482番「わが主イェスいとうるわし」

説　教：「海と空のあいだに」

頌　栄：讃美歌21　27番「父・子・聖霊の」

後　奏：M.ヴェックマン作曲
　　いざ喜べ　全ての神の子

説教
院長・学長
宗教センター所長
大西 晴樹

奏楽
礼拝オルガニスト
渡辺 真理

後奏の後、渡辺 真理氏（礼拝オルガニスト）によるオルガン演奏による賛美を行います。

次回第67回水曜公開礼拝は2023年11月15日です。

第65回 水曜公開礼拝報告（説教：田島 卓、奏楽：山司 恵莉子）

2023年９月20日（水）　18：30－19：00

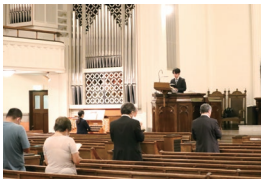
讃美歌：39番 「ひくれてよもはくらく」
聖　書：レビ記　19章17-18節
讃美歌：10番 「わがたまたたえよ」
説　教：「私の隣人とは誰ですか」
頌　栄：539番 「あめつちこぞりて」

【説教要旨】

聖書における最も重要な教えとは何かということをめぐって、有名な箇所があります。その物語の中で、イエスは、第一に神を愛すること、第二に人を愛することが大事だといい、「善いサマリア人」と言われる、有名な箇所が続きます。ところが「善いサマリア人」の物語は、よく読んでみると、神を愛することと人を愛することが両立しないのではないか、という問いを投げかけています。そこでイエスが引用したレビ記19章を読んで見ると思いがけない構造があることがわかります。神への愛は、人への愛の中でこそ現れてくるのです。

（大学宗教主任　田島 卓）

前　奏：J.S.バッハ作曲（A. イゾワール編曲）《目覚めよとわれらを呼ぶ声あり》BWV 645
後　奏：J.S.バッハ作曲（F. リスト編曲）《わがうちに憂いは満ちぬ》BWV 21



前奏曲は、バッハが自身のカンタータ第140番をオルガン独奏用に編曲したものに、フランスのオルガニストであるアンドレ・イゾワールが更に２声のオブリガートを付した作品です。原曲の美しさはそのままに、新たな彩りが加えられています。

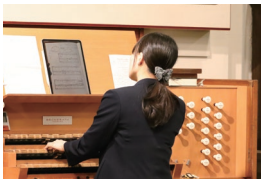
後奏曲は、バッハのカンタータ第21番の、高らかに神をほめたたえる最後の合唱とオーケストラの曲を、リストがオルガン独奏用に編曲したものです。リスト自身もオルガン曲を作曲していますが、この編曲にもリストらしい快活さと華々しさが表れています。　（礼拝オルガニスト　山司 恵莉子）

礼拝とその後の19時00分から30分までの山司 恵莉子氏によるオルガンによる賛美に37名の方が参加されました。

礼拝後、音楽による賛美（オルガン独奏：山司 恵莉子）

1. C. フランク（1822-1890）作曲　祈りop. 20
2. M. デュプレ（1886-1971）作曲　行列と連祷op. 19, no. 2

「祈り」は《オルガンのための６つの小品》の５曲目として作曲され、オルガンの師であるフランソワ・ブノワに献呈されました。憂いに満ちた嬰ハ短調が苦しみや悩み、迷い、諦めを表していると同時に、曲の終盤で現れる長調の部分は神への賛美、あつい信仰や希望を表しているように思われます。フランクの芸術に対する謙虚さや勤勉さ、信仰を追い求める静かな情熱が表現されている精神的な作品です。



「行列と連祷」はデュプレの生前から人気があり、後に自身によってオルガンと管弦楽のために編曲されました。優しく包み込むようなコラールが提示されたあと、連祷のテーマが繰り返され、やがて２つのテーマが重なり合い、最後は大聖堂の鐘が鳴り響くように終わりを迎えます。　（山司 恵莉子）

宣教師たちの生涯と思想（7）H(ハーマン)・H(ヘンリー)・クック先生の生涯

H・H・クック先生は、まさに「行動の人」でした。席の暖まる暇もないほどに、赤塗りのオートバイにまたがって、秋田・山形両県中を駆け巡り、熱心な伝道活動を行いました。酒田教会牧師であり、クック先生の協力者として度々伝道旅行を共にした三浦鐵造は、その様子を記しています（三浦鐵造「紀念の旗」＜原文ママ＞『両羽の光』第28号）。それによれば、クック先生は伝道集会を開く時には、その案内を大書した旗を愛車に翻し、警笛を轟かせながら町中を巡り、「今晩、幻灯会（幻灯機を用いた伝道集会）ありまーす」と大音声で叫んだそうです。

さらに、ヴァイオリンを弾きつつ、愛唱讃美歌『主我を愛す』（英題 *Jesus Loves Me, This I Know*）を大声で朗誦していたため、クック先生は「主我を愛す男」（Jesus Loves Me Man）として秋田・山形では知れわたっており、クック先生が来ると、たくさんの子どもたちが、「主我を愛す男」が来たと大騒ぎしたと伝えられています。ある年の伝道旅行では、15日間のうちに８ヶ所で14回の伝道集会を開催し、２万冊以上のトラクト（小冊子）を配布したとあり、当時の状況が偲ばれます。

（大学宗教主任　藤野 雄大）

クック先生の路傍伝道の様子
（*The Apostle of Ryo-U*,P.42より転載）。
中央上段に紙芝居のようなものを用いて説教するクック先生が写る。

― 建築が語る東北学院の歴史（22）―

羽生義三郎が設計した教会建築の中に、国の登録有形文化財に登録されている建物が１棟あります。日本基督教団一関教会（岩手県一関市）です。

一関教会は、昭和４年（1929）に竣工しました。これは、前号で紹介した岩沼教会より１年早く、土樋キャンパスの礼拝堂からは３年早い建築となります。羽生は昭和３年（1928）まで一戸町（岩手県）で、また昭和４年から猪苗代町（福島県）で教師を務めた記録がありますので、彼は、そうした時期に請われて両教会の新築設計を支援したことになります。

下に、岩沼教会と一関教会の内観を並置します。これらを見ると、両建築が１人の建築家の作品であることがよくわかります。直線でアーチを組んだような天井形式、柱の無い空間を支えるため、頭上に細い鉄材を張る構造形式、そして祭壇の意匠は、とてもよく似ています。しかも、こうしたスタイルは全国的に普遍的なものではありません。一方、双方は完全に一致するわけでもありません。こうした点には、各々の個性を見ることもできます。（続）

（工学部　﨑山 俊雄）

岩沼教会講堂内観

一関教会講堂内観

TGCFゴスペルワークショップのお知らせ

東北学院クリスチャンフェローシップの特別企画として、ジョン・ルーカスさんをゲストにお招きして、ゴスペルワークショップを開催しています。第１回目は、学生の方々に加えて、一般の方々の参加も与えられ、実りある集会となりました。第２回目も、発声やボイストレーニングを学びつつ、共にゴスペル曲を練習いたします。

国内外で活躍するプロに学べる特別な機会となっていますので、ぜひご参加下さい。

第２回　ゴスペルワークショップ

【日　　時】10月26日（木）15：30 ～ 17：00（受付開始：15：00）
【会　　場】五橋キャンパス　押川記念館　押川記念ホール
【定　　員】50名
【参 加 費】無料
【申　　込】必要
【申込方法】東北学院HP、または右のQRコードよりお申込み下さい。

なお定員に達した時点で申込を終了させていただきます。

また東北学院の生徒及び学生が優先となります。一般の方の申し込みに関しましては、イベント１週間前に参加の可否の連絡をいたします。ご了承下さい。

（宗教センター主事　佐藤 由子）

美術による賛美（22）美術（イコン）と非美術（アイドル）

聖体顕示台
71cm 15世紀
リースボルン
https://westfalen.museum-digital.de/object/655

既に『水曜通信』の「美術による賛美」のコラム（特に11,18,19）で指摘したように、美術を含む全ての芸術はキリスト教によって成立しました。つまり被造物である物質が神を表すことができる、それが芸術です。その根拠は「神の物質化」つまり「受肉」なのです。そして芸術は、被造物の「もの」で、そこに命がこもらないから、展示が可能なのです。博物館・美術館の起源です。人となったイエス様の身体を見せる聖体顕示台は「モンストランツ（monstranz）」ですが、展覧会のイタリア語も「モストラ（mostra）」で繋がっているのです。そして明るい空間の中で細部まで見えるように展示します。

日本の状況はどうでしょうか？日本では昔から作品は作者の自己表現だったとドナルド・キーン先生（1922-2019）は書いていますし、「作品に命がこもる」とは、普通に言います。それは単なる比喩とも思えません。仏像はそもそも秘仏だし、単なる「もの」ではないから、現代でも展示することに反対する人が多いです。ですから作品を「もの」と見れば、「美術（イコン）」となり、生きていると見れば「非美術（アイドル）」となります。その区別は曖昧なまま今では「アート」と呼んだりもします。

作品を隅々まで見せるホワイトキューブの展示　ヨゼフ・アルバース展
ロンドン　2014年
https://en.wikipedia.org/wiki/White_cube_gallery

暗い中で「見えない」「見せない」仏像展示
京都国立博物館　平成知新館
https://www.kyotodeasobo.com/art/static/column/museum_kikou/21_01.html

そういう中で、日本のキリスト教美術とは主題がキリスト教関係の作品とする他ないでしょう。画家の内面の信仰はうかがい知れぬからです。

（史資料センター客員研究員　鐸木 道剛）

LIFE LIGHT LOVE SINCE 1886

いのち　ひかり　あい

東北学院スクールモットー
LIFE LIGHT LOVE（いのち・ひかり・あい）

東北学院宗教センター編「水曜通信」
第31号
2023年10月４日発行
〒984-8588　仙台市若林区清水小路３-１
発行責任者：宗教センター主任　原田 浩司
東北学院宗教センター　TEL：022-354-8310
Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp